

称号及び氏名	博士（人間科学）	廣瀬 陽一
学位授与の日付	平成27年3月31日	
論文名	「在日コリアン文学」の始源としての金達寿文学——その総合的研究」	
論文審査委員	主査	細見 和之
	副査	酒井 隆史
	副査	山崎 正純

要旨

本稿は、戦後日本の在日朝鮮人を代表する^{キムダルス}金達寿の知的活動を総合的に考察し、そのアクチュアリティを提示するものである。金達寿の本格的な知的活動は、日本の敗戦＝〈解放〉後、1946年4月に創刊され、編集長をつとめた日本語総合雑誌『民主朝鮮』に、日本語で「後裔の街」などの小説を發表することから始まった。その後も彼は次々と小説を發表し、「在日朝鮮人文学」というものの存在を日本社会に認知させるのに、重要な役割を果たした。さらに50年代から60年代にかけて、主に新日本文学会の文学者とともに、リアリズム研究会などの文学運動を独自に主導した。だが70年前後を境に、彼の活動領域は文学から古代史研究へと移り、文学活動は「行基の時代」（78～81年）で終わった。彼はその後、死去するまで古代史研究に没頭した。

また彼は、長らく北朝鮮を支持する左翼系在日朝鮮人組織に属し、日韓・日朝関係や韓国・北朝鮮関係で何か問題が起こると発言を求められた。また^{キムヒロ}金嬉老事件では特別弁護人を務め、韓国の詩人・^{キムジハ}金芝河の投獄と死刑判決に対しては日本の知識人とともに抗議のハンストを行った。この他にも、『民主朝鮮』から『季刊青丘』まで、様々な雑誌の編集長や編集委員をつとめた。これらの活動をとおして、彼は多くの日本人の目を、韓国・北朝鮮や在日朝鮮人に向けさせ、理解を促す架け橋の役割を担った。

彼の活動はこのように、極めて多様な領域にわたっている。しかし現在まで、彼に関する研究は小説を個別に考察するにとどまり、彼の知的活動全体を射程に入れた議論は成されていない。そこで本論は彼の知的活動を①文学、②社会主義を標榜する国家や組織との関わり、③日本古代史の3つに分類して考察した上で、それらを総合することで、知的活

動の全体像とそのアクチュアリティを提示する。

本論は序論と結論および4章から成り、各章は2～3節に細分化される。第1章は2節に分けられる。第1節では金達寿の生涯と活動を概観した。第2節ではこれまで日本と韓国で発表された同時代批評や学術論文を、(1)日本人が日本国内で発表したもの、(2)コリアンが日本国内で発表したもの、(3)韓国国内で発表されたもの、に分類し、それぞれの傾向と共通する問題点を明らかにした。その上で金達寿を、文学や古代史という特定の学問領域で活動した作家や古代史研究者ではなく、学問領域や党派を互いに独立させ自己完結的なものにしていく理論的基盤に対して根本的な異議申し立てを行うことで、「日本と朝鮮との関係を人間的なものにする」ことを生涯の課題とした知識人ととらえることができることを示した。

第2章は文学活動に焦点をあてて考察したもので、3節に分かれる。第1節では、金達寿が〈解放〉後まもなく提唱した、「日本語で書かれる朝鮮文学」概念をとりあげて論じた。彼はこの概念によって、在日朝鮮人が戦後もあえて日本語で創作活動をするということについて、一方では「朝鮮文学」の可能性を広げるものであり、他方では日本の左翼勢力との連帯を可能にするものと主張した。そこで第1節ではこの概念が意味するものを考察した上で、この主張が、40～50年頃にかけての彼の文学活動に、どのように実践されたか／されなかったかを問題にした。

第2節では、金達寿の文学を本質的に志賀直哉から学んだ、自然主義リアリズムの文学の系譜に位置づける従来の通説を批判し、実際には彼が50年代を通じていかに志賀文学や自然主義リアリズムから訣別すべく闘争したかを論じた。さらに「日本の冬」を取りあげ、50年初頭に起こった日本共産党内の激しい権力闘争に巻きこまれた体験から、彼が日本と朝鮮、日本人と朝鮮人が対立関係ではなく、対立させられた関係にあるという認識を得たことを示した。その上で「朴達^{パクダリ}の裁判」に焦点をあて、この小説が50年代をつうじた金達寿の文学的・政治的闘争の大きな成果であることを明らかにした。

第3節では、「朴達^{パクダリ}の裁判」発表と前後して、本格的に運動を開始したリアリズム研究会に焦点をあて、その活動をつうじて彼の文学が変質していった過程を論じた。まずリアリズム研究会結成の経緯や、研究会をめぐる同時代の状況を概観し、研究会が全国的な文学団体へと拡大していきながらも、次第に共産党の影響下に置かれるようになる過程を明らかにした。その上でその悪影響が金達寿の文学活動に及んだことを、「公僕異聞」を取りあげて考察した。そして最後に、金達寿が研究会の活動をどのように総括したかを考察し、この経験から何を学んだかを明らかにした。

第3章では、2節にわたって国家と組織との関わりを問題にした。彼は朝連から総連にいたるまで一貫して反韓国・親北朝鮮系の社会主義組織に所属しつづけた。しかし81年3月の訪韓を転機として、急速に韓国社会の礼讃に転じた。この態度変更について、第1節では、(1)『朝鮮』刊行直後の総連側の批判キャンペーン、(2)帰国事業への関わり、(3)講演会中止事件から訣別、という3つの局面を取りあげ、それをとおして総連と彼との軋轢が深まっていくとともに、北朝鮮や総連に幻滅して訣別する過程を明らかにした。そして第2節では、アメリカ占領軍の権力を背景に、李承晩が〈親日派〉を結集させて韓国国家を樹立させた過程を同時代的に見聞している金達寿が、韓国をどのように表象し、攻撃してきたかを整理した。その上で、訪韓にいたる経緯と、訪韓後に浴びせられた周囲からの批判がどのようなもので、金達寿たちがどのように反論したかを取りあげて考察した。これをとおして、彼の北朝鮮から韓国への態度変更が韓国社会の無条件の肯定ではなく、また社会主義から民族主義への態度変更とイコールでもないことを示した。

第4章は、70年前後から本格化した、金達寿の古代史研究に焦点をあてて考察したもので、3節にわけられる。第1節ではまず日韓における彼の古代史研究をめぐる状況と、彼が古代史研究に関わっていく過程を整理した。その上で『日本の中の朝鮮文化』を国木田独歩の「武蔵野」と比較して、金達寿の文学活動と古代史研究とが、互いに無関係ではなく、いずれも文学や古代史という学問領域を成立させている言説の根拠を問いただすという点で、連続性が認められることを論じた。さらに彼の古代史研究が、各地の郷土史家や古代史愛好家と共同作業的に行われたものであった点で、リアリズム研究会などの文学活動ではついに実現できなかった、大きな飛躍をもたらす運動の在り方を、彼にもたらしたことを明らかにした。

第2節では、金達寿が〈皇国史観〉を支える鍵と考えた、「帰化人」という語が意味するものをどのように問いなおし、日本人自身の問題へと転回させようとしたかについて論じた。一般に「帰化人」への差別的な認識は、現代の在日朝鮮人差別につながるから「渡来人」と呼ぶべきと考えられている。しかし金達寿はこれに対して、在日朝鮮人は「帰化人」でも「渡来人」でもないと主張した。この発言を踏まえて、古代における「帰化人」の役割を積極的に評価した、戦後日本の歴史学者による「帰化人」概念をあらためて考察した。そして金達寿が「帰化人」ではなく「渡来人」という語を主張した背景に、彼らへの差別が日本人自身への自己差別につながることを啓蒙し、日本と朝鮮、日本人と朝鮮人との関係を人間的なものに変える戦略があったことを明らかにした。

第3節では金達寿の最後の小説となった「行基の時代」を取りあげ、行基の生涯をとお

してあらためて問い直そうとした〈社会主義〉を、小説連載中の出来事である訪韓後の金達寿の態度変更と重ねて論じることで、彼が最後に到達した〈社会主義〉が何であったかを考察した。まず「行基の時代」に描かれた行基の足跡を、(1)文献学的・考古学的研究から得られた歴史的事実、(2)金達寿が歴史的事実と考えた「史実」、(3)彼の創作、に分類した。そして彼の小説には、学術研究から見て、不確実な事柄や創作が多数混じっていることを指摘し、それにもかかわらず、古代における「大和朝廷」の成立と朝廷内の権力闘争が、当時の朝鮮半島情勢と密接な関係にあることを描いた点で、現在から見て先駆的な視点が見られることを明らかにした。そして出家した行基が民衆とともに社会事業を行うようになったことと、金達寿の文学運動から古代史研究への転回とが、平行関係にあることを示し、「行基の時代」には「朴達の裁判」で開示された〈飛躍〉と同じものが認められることを明らかにした。その上で、しかし金達寿は、訪韓後に日本人の友人たちから「よく生きて帰ってこられた」とねぎらいの言葉をかけられたことに衝撃を受け、新たな認識を練り上げていくことよりも、天皇の「お言葉」を利用してでも韓国に対する日本人の悪イメージを払拭することを優先してしまったことを問題にした。そしてこのことが、金達寿の〈社会主義〉の理念の変質をもたらし、ひいては彼自身も日本社会と在日コリアン社会の両方から忘れ去られることにつながったことを論じた。

結論では、2～4章で展開した議論を総合し、彼の知的活動の根底には一貫して、民族の違いや学問領域の壁、専門家とアマチュアの隔たりを超える普遍的な批判精神があったことを肯定的に評価するとともに、彼の議論には資本主義への批判や、日本と朝鮮との関係を中華帝国との関係の中で考察する視点などが不足ないし欠如しているという限界もあることを示した。その上で日韓関係が悪化の一途をたどっている現在こそ、日本と朝鮮、日本人と朝鮮人との関係を人間的なものにしていくために、その道すじを指し示した金達寿の知的活動に、あらためて目を向けることの重要性を提示した。

学位論文審査結果の要旨

本学位論文審査委員会は、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

(1) 研究テーマが絞り込まれている

本論文は、「在日コリアン文学」の出発点に位置づけられてきた金達寿の知的活動の総体を、日本の敗戦直後の文学者としての歩みから、後半生に金達寿が打ち込んでいった古代史研究に至るまで、一貫して捉えようとするものである。したがって、本論文の研究テーマは、金達寿の知的活動の解明に絞り込まれている。

(2) 論文の方法論が明確である

本論文は、金達寿が生涯のなかで活字化した文章、金達寿に触れた日本と韓国で発表された文章（日本語およびハングルで記されたもの）を素材とする文学研究の手法を取るとともに、神奈川近代文学館に所蔵されている金達寿の直筆原稿、メモ書き等を参照することによって、一部文献学の方法も用いている。さらに、わずかながら生前の金達寿を知るひとへのインタビューの成果を組み込んでいる。そのインタビュー部分については、本研究科人間科学専攻における研究倫理審査委員会による審査を経ている。いずれにおいても、本研究における方法論は明確である。

(3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている

本論文においては、とくに第1章において、金達寿に触れた文章を詳細に紹介している。金達寿を研究対象として論じた研究書と呼べるものはまだわずかだが、金達寿になんらかの形で触れた文章は、日本と韓国でかなり存在している。本研究ではそれらの文章を、①日本人が日本国内で発表したもの、②コリアンが日本国内で発表したもの、③韓国国内で発表されたもの、の3つに分類して、調査がなされている。それによって、これまで金達寿に触れた文章は圧倒的に「文学」に関するものが多く、晩年の古代史研究に触れたものはわずかであること、また、古代史研究に触れたものにおいては、今度は金達寿の文学活動に目が向けられていないこと、総じて金達寿の全体像を描ききったものは見られないことが指摘されている。

(4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

本研究においては、金達寿が活字として書き残した文章が研究の中心的な素材となっているが、単行本に未収録の文章も多く、金達寿の全体像を描くためにはそういう目に付きにくい文章にも十分注意を払わねばならない。また、金達寿は初期にわずかながらハングルで文章を発表していたこと、現在では韓国で金達寿への関心が高まっていることなどから、金達寿をきちんと研究するためにはハングル（韓国語）の読解能力が必要となる。本研究には、日本語とハングルの両方からのアプローチによる調査データが十分に吟味して用いられている。

(5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

本論文の先行研究にはない新しい知見はまずもって、前半生の文学者としての金達寿、後半

生の古代史研究者としての金達寿という二つに分裂していた金達寿を、一貫した像のもとで捉えたところにある。その際、本研究は、自然主義リアリズムの作家と目されてきた金達寿のうちに、むしろ自然主義を克服して新たなリアリズムを獲得しようとして文学闘争を繰り広げていた作家の姿を掘り起し、その成果を「朴達の裁判」に認める。そのうえで、「朴達の裁判」のテーマを、当時日本で展開されていた転向論に根本的な再考を迫るものとして読み解く。さらに、「朴達の裁判」で獲得された視点の延長上に、後半生の古代史研究および金達寿が生涯追い求めていた「社会主義」を位置づけ、物議をかもした軍事独裁政権下の韓国への訪問についても、新たな視点で捉えることを提起している。これらの点はいずれも、先行研究にはない新しい知見である。

(6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている

金達寿が書き残した文章（日本語によるものとハングルによるもの）を、あらゆる発表媒体から掘り起こし、それらが書かれた時代的な文脈を確認すること、同じく金達寿について書かれた文章をおびただしく掘り起こし、それらが書かれた文脈を確認すること、そういった手続きを踏まえて、金達寿による文章を深く読み解きつつ、金達寿について書かれた文章を手際よく配置することによって、金達寿の生涯にわたる知的活動の意味（日本と朝鮮の関係を人間的なものにしていくこと）について、必要にして十分な議論と実証が展開されているといえる。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

金達寿については、在日文学の原点として評価されながらも、本格的な研究はなされてこなかった。とりわけ、前半生の文学者としての姿と後半生の古代史研究者としての姿は、分裂ばかりを印象づけてきた。そのなかで、初期から晩年まで一貫して金達寿を捉える本研究の意義は大きい。しかも、文学者としての金達寿のうちに自然主義リアリズムとの文学的闘争を繰り広げた金達寿、日本の転向論に根本的な省察を促そうとした金達寿の姿を提示するなど、その研究はきわめて刺激的である。晩年の古代史研究を金達寿が思い描いていた社会主義像と重ねる理解、そこから訪韓の意味を問いなおす視点もまた重要である。いずれの点においても、金達寿研究のみならず、広く日本の、さらには東北アジアの文化史研究に新たな地平を切り開く、独創性を備えた研究であるといえる。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員が一致して、本論文を博士（人間科学）学位の授与に値するものと判断した。